

シンポジウム

「中・近世の地中海世界と日本 —confraternitas（信心会・兄弟会）を鍵言葉にして」

はじめに

根占 献一

2005 年 6 月 11 日、以下のような趣旨で早稲田大学の地中海研究所とヨーロッパ文明史研究所の共同主催によるシンポジウム「中・近世の地中海世界と日本 confraternitas（信心会・兄弟会）を鍵言葉にして」が同大学文学部で行われた。

「キリシタンの世紀」と称される 16 世紀半ば頃から 17 世紀中葉までは、日本とヨーロッパ(主として南欧)の邂逅が生じた世紀として知られている。それは、所謂地理上の発見の時代とか、大航海のあるいは世界システムの時代とか、種々に評される年代に属している。そのような時に世界宗教としてのキリスト教がこの地に伝わることで、新たな社会的・文化的衝撃がもたらされ、これ以後長く等閑視できぬ史実が積み重ねられていく。

伝来したものはこの宗教の教義だけではなかった。キリスト教もまた地中海に沿って生まれ、発展したのだが、これと関わりの深いラテン文化もわが国に到着した。極東の地でキケロやウェルギリウスが読まれ、イベリアの地では学位を修める日本青年も出た。モンテーニュがローマ市民になった頃に、原マルチーノらも同市民となった。『エッセー』の著者と同じくヒューマニストであった原はその揺るぎないキリスト教信仰を考えると、トマス・モアのようなクリスチャン・ヒューマニストという言い方が許されよう。

この東西の出会いがしかし、わが国における歴史研究の「棲み分け」、日本史・東洋史・西洋史の三分区により、「キリシタンの世紀」の内実からの理解を不十分にしてきたように思われる。日本列島に住むヨーロッパ研究者はそれを日本史の問題と見なして自分の分野に関わらずとし、他方で日本史の研究者はイベリア半島の関係ではこの邂逅を考えることがあっても、イタリアを中心とした地中海の社会と文明の関連で、長期的視点に立って考察する意識は乏しかったのではないだろうか。

そこで、本シンポジウムでは西欧と日本の歴史研究者が一堂に会し、コンフラテルニタス、兄弟会(信心会)を切り口にして、決して棲み分けできない歴史全体の厚みを明示したいと考える。

この人的結合がヨーロッパではどのように生まれて発展したのか、またキリスト教が広まった地域ではどのように受容されたかを検討に付したい。

この企画を思いついたのは、川村信三著『キリシタン信徒組織の誕生と変容 「コンフラリヤ」から「こんふらりや」へ』（教文館、2003年）が出版されたことにある。コンフラリヤ、兄弟会にいささか関心を持っていたので、手に取るのが楽しみであった。読んでみると、非常に力強い論拠が展開されていることが分かった。南欧の兄弟会が日本で根付く際の、旧来の仏教組織との関連性や、キリシタン禁制下でも、信徒たちがキリスト教信仰を維持できた背景にこの組織があったとの視点は斬新かつ刺激的であった。ただ、著者自身は欧米でも学び、その研究動向を把握されているものの、日本における西欧研究者の関連論文には言及がなかった。他方、「コンフラリヤ」（兄弟会）に関心を有する、わが国のヨーロッパ研究者はこの書を自分たちの関連書とは考えていないだろうと予想した。このため私には、西欧と非西欧、日本の歴史研究者が情報を交換する対話の場を設け、互いの研究状況を理解し合うことは有意義なことと思われた。そこで、ヨーロッパ全般の兄弟会に詳しい河原温（首都大学東京）先生とイタリアに詳しい米田潔弘（桐朋学園大学）先生に声を掛けるとともに、川村信三（上智大学）先生に連絡を取った。川村先生から推薦された、日本近世史の大橋幸泰（早稲田大学）先生、河原先生から推挙された、スペイン史の関哲行（流通経済大学）先生にも参加していただくことになった。

以下の各論文は、当日のこれらパネリストの発表順に基づくものである。導入となる河原論文では、ヨーロッパ全般の兄弟会の種類、これらと社会との関連、イタリア、スペインなどのそれらの特色、日本の「こんふらりや」との共通的活動が指摘される。米田論文では、フィレンツェとポルトガルの兄弟会の具体的な関係、ドチリナ・キリシタンの教育的意義とその伝播が指摘される。関論文では、海外植民地からスペインに流入した黒人奴隷の兄弟団が詳述される。この論文から、特にポルトガルの関わるアジアのそれはどうであったのか、知的好奇心が膨らむ。川村論文では上記の高著からの詳細な概要が示されているが、南欧と異なる地域、日本で「こんふらりや」が何故発展したのか、ひとつの歴史観に基づいて考察される。大橋論文では、所謂隠れキリシタンとその「こんふらりや」が村社会の実態から検討される。キリスト教圏からの兄弟会がヴァナキュラーな変容を見せること、またその信徒たちの属性が多様であるとともに主体的な生活者であることが力説される。当日の会場では、これらの諸論文の繋がり具合、また東西のコンフラテルニタスの関係性などには進行役の私が寸言を挟んだが、本稿では省略されている。

発表終了後、質疑応答に入り、活気に満ちた集いとなったのも、各先生方のご協力があったればこそ、である。五名の諸先生、シンポジウム開催に賛同された地中海研究所所長小林雅夫先生、早稲田大学の村井誠人、井内敏夫の両先生、そして質問もされた小倉欣一先生、福山佑子さんら同大学大学院生の方々、また多分野に亘る多くの参集者、そして質問を寄せられた方々に心よりお礼を申し上げる次第である。このような人的結合の雰囲気の中がこそ、問題の人的結合、兄弟会は理解されるのであろう。